



京都研修レポート

2008.5.23～5.24

古都・京都。

石庭の有名どころ、 龍安寺。

「八相の庭」 東福寺。

生命みなぎる静寂、 白沙村荘。

砂紋と石が織りなす 大徳寺。

嵐山の名所、水墨画的表現、 天龍寺。

足下の表情、 大河内山荘。

洋と和、閑静な別宅、 無鄰庵。

竹林、 嵐山・嵯峨野。

龍安寺



有名な「龍安寺の石庭」は、幅 25m、奥行 10m ほどの敷地に白砂が敷き詰められている。

「古都京都の文化財」の一部として世界遺産に登録されている。

それだけ有名な枯山水の石庭は、修学旅行生でにぎわっていた。

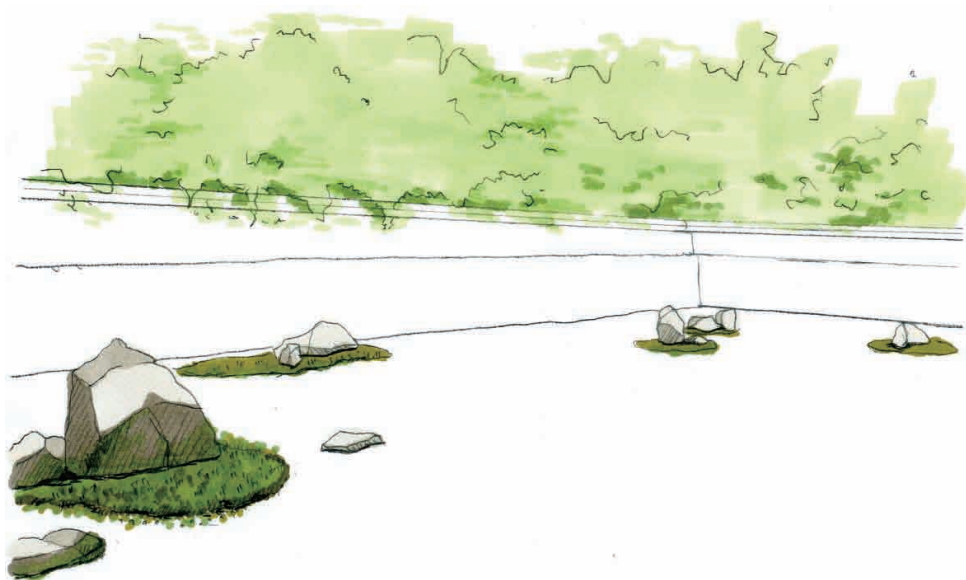
15 個の石は、庭をどちらから眺めても、必ず 1 個は他の石に隠れて見えないように設計されているという。

しかし、中の部屋から 1 カ所だけ 15 個の石全てが見える位置がある。

東洋では、十五夜（満月）にあたる 15 という数字を「完全」を表すものとしてとらえる思想があり、15 に 1 つ足りない 14 は「不完全さ」を表すと言われている。また、日本には「物事は完成した時点から崩壊が始まる」という思想があり、建造物をわざと不完全なままにしておくことがある。

だが、この程度の面積の庭に 15 個の石を並べれば、そのうち 1 つは隠れて見えなくなるのはむしろ当然のことだとする意見もあり、これを表現意図とする考えには賛否両論があるらしい。

作者、作庭年代ともに諸説あって定かでない。



この庭には、「虎の子渡しの庭」の別称がある。

虎は3匹の子供がいて、必ず1匹は必ずどう猛で、子虎だけで放っておくと、そのどう猛な子虎が他の子虎を食ってしまうという。そこで、母虎が3匹の子虎を連れて大河を渡る時は次のようにする。母虎はまず、どう猛な子虎を先に向こう岸に渡してから、いったん引き返す。つぎに、残った2匹のうち1匹を連れて向こう岸に行くと、今度は、どう猛な子虎だけを連れて、再び元の岸に戻る。その次に、3匹目の子虎を連れて向こう岸へ渡る。この時点で元の岸にはどう猛な子虎1匹だけがついているので、母虎は最後にこれを連れて向こう岸に渡る。3匹の子虎を渡すのに3往復半するわけである。龍安寺の石庭はこの様子を表したものだというわけである。

という話は有名なんでしょうか。調べて、初めて知った。

たしかに、そうは見えなくもないが、よく分からない。何を言われても、「あー、なるほど」と思う気がする。

しかし、逸話や謎があることが、見た人に何かを感じさせ、惹き付ける魅力のひとつになっているんだろう。



もう1つの有名どころ、つくばい。

真ん中の四角い部分を「口」と見立てて、漢字の一部に取り込み「吾、唯足るを知る」になる。デザインされている。

現代にいたっては、「デザイン」だとか、「アイディア」だとかいう言葉でうまく言う事は出来る。当時の人たちは何を思って、どう表現したんでしょうか。

今、見れるのはレプリカですが、当時、同じ場所で、同じものを見て、自分と同じように感じた人が、遥か昔にいたんだろうか。

そう考えると、不思議な気持ちになった。

